



Title	The stone is too heavy for me to lift (*it)
Author(s)	好田, 實
Citation	大阪外大英米研究. 1985, 14, p. 47-72
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99082">https://hdl.handle.net/11094/99082</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

The stone is too heavy for me to lift (\*it)

好 田 實

1. 英語には、いわゆる遡及不定詞 (Retroactive infinitive) なるものがある。次の例文では、(1) to please は John に、(2) to look at は Mary に、(3) to sleep on は the mattress に、to kick は the football に、それぞれさかのぼって、それを論理的な目的語とする現象が見られる。

1. John is easy to please
2. Mary is pretty to look at
- 3.a the mattress is too thin to sleep on
- b the football is soft enough to kick

これらを含む文がどのようにして派生されるかに関しては、tough 移動変形方式と目的語削除変形方式とをめぐって活発に議論が展開されてきて、近頃では痕跡理論を用いて wh 移動変形で説明する分析法に見るべきものがある。しかしながら、本論の目的は、このような分析法の長所短所を論じて代案を示すという野心的なものでなく、議論の過程で出される文法性についての言語学者の判断の信頼性および組上に載せられるデータそのものの妥当性に疑問を投げかけ、標題の文は the stone is too heavy for me to lift (it) でなく、it はあくまでも姿を見せないことを明らかにし、根底にある構造が同じであると思われても意味の微妙な差が統語上にも現われること、またそれは少数の論者が自己の内省や推理に頼るというのではなく、より信頼のおけるデータで検証されるべきことを論ずるにある。

2.1. 標題の文 (4) は一般に (5) と同義とされる。

4. the stone is too heavy for me to lift
5. the stone is so heavy that I can't lift it

(5) では、lift の論理的目的語が代名詞の形で目的語の位置に姿を現わし、遡及の現象は見られない。従属節とはいえ、that 以下は独立性を強め、いわば that を境にして独立採算性・自給自足の 2 世帯が並ぶことになる。

Lasnik and Fiengo (1974) によれば、(1) の easy の類の形容詞と名詞 (tough predicates) および (2) の pretty の類の形容詞と名詞 (pure OD predicates) はともに VP 補文を取るのに対して (3) の too と enough<sup>註1</sup> は VP 補文または S 補文を取る。

- 6 Einstein is too well-known to travel unnoticed
- 7 Mary is too clever to be defeated in a debate by Bill
- 8 my campaign manager is too stupid for me to win the election
- 9 Mary is too clever for there to be any disagreement concerning her intelligence

補文内に目的語がある場合もあるが、それはどう考えるのか。

- 10 a this problem is too abstract for Bill to solve
- b this problem is too abstract for Bill to solve it<sup>註2</sup>

一見すると、変形の適用が任意であるように見えるが、そうではなくて、互いに補文の構造を次のように異にしているという。

- (a) ...[<sub>PP</sub> for Bill] [<sub>VP</sub> to solve]
- (b) ...[<sub>S</sub> for Bill to solve it]

(a) では目的語削除変形 (Object Deletion - 以下 OD と略記) が義務的に適用されるが、(b) では指定主語条件 (Specified Subject Condition - 以下 SSC と略記) に妨げられて適用されない。(10 a) では、for Bill が母型文の中で生成されると考えるわけで、これには外置変形 (Extraposition) が可能だが、(10 b) には無理である。

- 11 a for Bill, this problem is too abstract to solve
- b this problem is too abstract to solve, for Bill
- c \*for Bill, this problem is too abstract to solve it

d \*this problem is too abstract to solve it, for Bill

12 \*this problem is too abstract to solve it

(12) は VP 内の目的語が母型文の主語と同一であるにも拘らず削除されていないので非文法的となるが、これを VP でなく、主語を欠く S と考えることに對しては、[ for NP + to VP ] の NP は文構成上必要不可欠な要素 (obligatory node) であるから、派生のどの段階かで必ず語彙項目で埋められる — Emonds' Convention — から表層構造に表われていなければならないとする。

以上は L & F (1974) の中から too AP (for NP) to VP の構文 (以下 too ... to ~ 構文と略記) における OD に関する議論の一部を抜き出したものである。同論文は、従来の tough 移動変形を再検討し、tough 構文における進行形の問題、'try' に関する問題、副詞 (e. g. intentionally) の問題などの処理に無理があるとして目的語削除変形を提案したものであったが、これに對して Jackendoff (1975) は、tough 移動と OD との間の優劣を決めるのではなく、痕跡理論を用いた解釈理論で克服すべき性質のものであることを示し、Chomsky (1977) も同様の考えである。筆者は今この理論に立ち入ろうとするものでないことは先に述べた。

2.2. Faraci (1974) も too ... to ~ 構文における OD を扱っている。

13 Mary<sub>i</sub> runs too fast —<sub>j</sub> to see what's happening  
around her

14 \*Mary<sub>i</sub> runs too fast for me to keep up with —<sub>j</sub>

15 \*Mary made the statue<sub>j</sub> too slowly for anyone to  
notice —<sub>j</sub>

16 [F.19] Mary made the statue<sub>j</sub> too small to notice —<sub>j</sub>

17 [F.20] Mary<sub>i</sub> made the statue<sub>j</sub> too small —<sub>j</sub> to notice it<sub>j</sub>

(14), (15) が非文法的なのは、L & F も言うように、OD が働らくのは叙述的な補語を含む文 (predicational expression, predication) に限られるから

であり、同一名詞句削除変形 (Equi-NP deletion) はこの限りでないから (13) は文法的である。(16) では the statue 以下が predication をなすから OD が適用できる。(17) も the statue 以下に predication があるのだが、(16)、(17) を比較して注目すべき主張をしている。すなわち Equi-NP deletion にも OD とは異なる制約があって、(17) のように、不定詞補文が predication の一部でないときには適用されるが、(16) では、to notice —<sub>i</sub> は predication の一部をなす VP であって、非特定の (unspecified) 主語を考えるのである。(16) と (17) の表層での違いは文末の it の有無だけであるのか、それとも文末まで待たずとも聞き手が内部構造の違いを知る音調の違いがあるのか。標題の問題や (10 a, b) と絡んでいて、検討に値する問題である。

L & F は、too … to ～ 構文で OD が適用されるのは不定詞補文が VP の場合に限るとの証拠として、OD が適用された受動態や there の挿入が見当たらないことをあげている。しかしながら、Faraci は次の例をあげて容認可能性 (acceptability) に意味の重要な関与があることを示唆する。

18 [F.28] \*John is too disoriented for the parade to be led by

19 [F.34] a this word is too short for the stress to be placed  
on

b this stuff is not nutritious enough for a baby to  
be weaned on

この関連で、彼は目的節 (purpose clause) でもその意味内容と母型文の動詞との密接な関係を指摘している。

20 [F.35] a we needed Bill<sub>i</sub> —<sub>i</sub> to lead the parade

b \*we needed Bill<sub>i</sub> for the parade to be led by —<sub>i</sub>

21 [F.36] a we chose Bill<sub>i</sub> —<sub>i</sub> to lead the parade

b we chose Bill<sub>i</sub> for the parade to be led by —<sub>i</sub>

(18) と (19)、(20) と (21) のいずれの場合も意味がどのようにかわっているかを明示していない。<sup>註3</sup> しかしながら、これを明らかにすることがわれ

われの抱える問題の解明に不可欠と思われる。まず目的節を取り上げると、(20)では補文が「ビルを何に必要としたか」よりもむしろ「ビルを必要としたのはなぜか」に対して動機を述べる側面が強いのにに対して、(21)は「ビルを何に選んだか」の問に対して「ビルにパレード引率者の役目を持たせる意図」を表明しており、「パレードの引率」という内容が、「なぜ」を期待させる *we needed Bill* に対してよりも、「ビルを選んだが、何にか」というふうに「どんな役目？」を期待させる *we chose Bill* に、論理的により自然に、より強く結びつくと考えられる。この意味上の緊密さのために、*for the parade to be led by* がその受け身形から明らかに *sentential* ののに、*for the leader of the parade* に相当する句に近いものとして振る舞うのであろう。

(20 a), (21 a) が *end-focus, end-weight* の普通の (*unmarked*) 形であるから、(21 b) は不自然と言わぬまでも必然性に乏しいことは言える。母型文の動詞と補文の論理的意味関係がそれほど緊密でない (20 b) では、言い換えれば補文の独立性が強いから、OD が行われないと考えてはどうか。OD を行わない場合でも *the parade* を目的節の中で *topic* としてわざわざ取り立てるための特別な理由がなければ不自然さは残るかも知れない。しかし、*him* を保持することによって自己充足的で安定するということはあるだろう。

先に見たように OD は一般に主題に対する叙述の中で起こるのだが、主題の持つ叙述の作用域とでもいうものをどこまで伸ばせられるかは、意味内容の論理的な関連性 (*relevance*) によるのであろう。(20 b) では、その作用域が文末まで及ばないで、補文が宙ぶらりんで不安定であるのを、目的語の出現で救うことになる。かかる視点から *too ... to* ～ 構文に戻って (18) を眺めると、「方向音痴過度」の尺度として「パレード引率の能力」を予想することはそれほど確率が高くない。しかしそれほど不自然でないかも知れない。そうとすれば、(20 b) と同様に、受け身形が不自然なために生ずる、いわば雑音や煙幕によって、主題の持つ叙述の作用域、言い換えれば、縄張りが狭められている。より普通の形を排して受け身形が採用されてパレードが新たに主題として取り立てられ、いわば分家を作ろうという形になっている。他方 (19) は (a), (b)

ともに補文を能動形にすれば総称人称の主語が現われる場合であるし、意味上も、それぞれ、for placing the stress (° stressing; accentuation) と for baby food [ at the weaning period ] に等しく、logical relevance も大きいと言える。(19b) は enough ... to ~ 構文であるが、(19c) の創作も無理でない。

19 c this stuff is too fibrous for a baby to be weaned on  
以上で、補文の内部構造から見て明らかに SSC 違反のものの中にも、意味を掘り下げて考えれば適格な表現といえるものがあるのが分かった。

2.3. 構造が同じでも acceptability が異なる文について、その理由の究明を十分しないために、揚げ足取りになるのは慎まねばならないし、また文脈を無視した議論も不毛であり危険をはらんでいる。

22 [B. & H.7] the house is ready for John to buy

23 [B. & H.8] the house is ready [ <sub>S</sub> for John to buy it ]

24 \*for John, the house is ready to buy

Bach & Horn (1976) が (22) は (23) の構造を根底に持つものであると主張する中で、for John は不定詞補文の中にあるものだから母型文中の for 句と違って前置できない((24))と言うのに対して、Chomsky (1977) は (25) をあげて、母型文中の for 句でも前置不能な場合がある故、B & H の議論は説得力がないと言う。

25 [C.150] \*for John, the house is ready (cf. for John, the  
problem is easy)

26 [C.149] the house is ready for John

Chomsky は (25) に「ある理由で (for some reason)」と付記しているにすぎないが、それを解明しておくことはわれわれのあとの議論に役立つと思う。まず、問題のない for John, the problem is easy を考えると、「(メアリでなく、ディックでなく) ジョンにとっては」「その問題は易しい」と言えば普通「解くこと」が頭に浮かぶ。例えば「問題作成の難易」を考えることも可

能だがむしろ例外的である。何も言わなければ to solve の省略と考えるのがごく自然である。他方、一概に「家の準備が整っている」と言っても「購入」「引越し」「下見」「賃貸」という具合に色々な場合が考えられる。仮りに「買えるように準備が整っている」とした場合でも、「(メアリでなく、ディックでなく) ジョンにとっては」と結びつけると、家の方で選好みするようでおかしい。家の準備状態を説明するものとして「ジョンの購入」が結合すべきであり〔for NP to VP〕の分離が無理なのはそのためである。もっとも、家の準備にしても、「ジョンには、家は用意できているが、結婚相手は決まっていない」とか「ジョンには、家の用意はできているし、就職先も決まっている」のような文脈でならば、for John, the house is ready も適格文だし、同様に (24) も受容できる。このような、the house is ready (to buy) 全体が新情報 (new information) であるような文脈でならば話は別だが、より普通の場合は (25) の中で ready に焦点 (focus) があり、それが新情報だが、最初に述べた理由で ready だけでは新情報として不十分である。なお (26) では、John が新情報であって「何のための準備か」は文脈上理解されていると考えるべきである。音調は次のようになるであろう。<sup>註4</sup>

- 25 \* for <sup>∨</sup>John | the 'house is 'ready  
       for <sup>∨</sup>John | the <sup>∨</sup>house is °ready (°r the <sup>></sup>house is °ready)  
 26 the 'house is °ready for <sup>∨</sup>John (°r the 'house is °ready for  
       <sup>∨</sup>John)

このように見てくると、Perlmutter & Soames (1979) が「英語には次のような対になる文がある」として列挙しているもののの中に (27 a, b) を見出しで不安を覚えるのは筆者だけではなからう。

- 27 a this rock is too heavy for me to pick it up  
       b this rock is too heavy for me to pick up

(27 a) には \* か少くとも ?? がつくべきである。筆者は以前から、this stone is too heavy for me to lift (it) ((27) と同意) とか (10 a, b) の this problem is too difficult for us to solve (it) といった記述を見ると、



論者の直観力や観察力に疑いを持つと同時に、言語研究におけるコーパス活用の重要性をますます痛感させられてきた。コーパスが十分でないときには、Quirk and Svartvik (1966) や Greenbaum and Quirk (1970) に示されているテクニック (elicitation experiments) によって資料を蒐集することが望ましい。以下に示すのは規模的に、そして特に方法論的に、理想にほど遠いものであるけれども、さしあたり間に合うものである。

3.1. まず too ... to ~ 構文についてのアンケート調査の結果を次に掲げる。<sup>註5</sup>  
表 1.

<u>Questionnaire</u>	
Which sentence in each of the following pairs do you think is the more correct or acceptable? Circle the letter 'a' or 'b' according to your choice.	
{ 1	1. a. He ran too fast for me to catch up with.
28	b. He ran too fast for me to catch up with him.
{ 5	2. a. He ran too fast for me to catch.
23	b. He ran too fast for me to catch him.
{ 18	3. a. It moves too quickly to see.
11	b. It moves too quickly to see it.
{ 18	4. a. It moves too quickly for most people to see.
11	b. It moves too quickly for most people to see it.
{ 19	5. a. He speaks too fast for me to follow.
10	b. He speaks too fast for me to follow him.
{ 29	6. a. The stone is too heavy for me to lift.
0	b. The stone is too heavy for me to lift it.

- { 2 7. a. She was living too close for me to avoid.  
 { 27 b. She was living too close for me to avoid her.  
 { 12 8. a. He was too fast a runner for me to catch up  
 { with.  
 { 17 b. He was too fast a runner for me to catch up  
 with him.  
 { 15 9. a. He was too fast a runner for me to catch.  
 { 14 b. He was too fast a runner for me to catch him.  
 { 27 10. a. It's too good a chance to miss.  
 { 2 b. It's too good a chance to miss it.  
 11. Bed! Bed! I couldn't go to bed!  
 { 10 a. My head's too light to try to set down.  
 { 19 b. My head's too light to try to set it down.

Nationality

If British, name your dialect

Age

Sex

THANK YOU VERY MUCH!

表 2.

問題 回答者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	年齢 性別
	a b	a b	a b	a b	a b	a b	a b	a b	a b	a b	a b	
1	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	20 / F
2	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	26 / F
3	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	22 / F
4	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	19 / F
5	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	29 / F
6	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	32 / F
7	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	48 / F
8	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	25 / F
9	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	29 / F
10	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	18 / F
11	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	19 / F
12	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	32 / F
13	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	19 / F
14	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	19 / F
15	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	19 / F
16	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	20 / F
17	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	20 / F
18	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	32 / F
19	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	18 / M
20	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	29 / M
21	<input type="radio"/>	*	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	29 / M
22	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	21 / M
23	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	24 / M
24	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	42 / M
25	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	20 / M
26	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	18 / M
27	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	18 / M
28	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	19 / M
29	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	43 / M
計	1 28	5 23	18 11	18 11	19 10	29 0	2 27	12 17	15 14	27 2	10 19	

\* no choice made

さきにも触れたように、ある表現の grammaticality や acceptability をコーパスによらずに調査しようとするとき、インフォーマントに直接的に yes か no の判断を求めるやり方よりも、作業をやらせることによって自然な反応を引き出す performance 方式が優れているが、後者は量的に膨らんで現実にはなかなか実施しにくい。筆者は the stone is too heavy for me to lift (\*it) を予想し、それを支持するデータを欲したが、ただこの文だけを取り上げて判断を求めるということだけは避けて、類似の文を多く与えて即答を求めた(表1)。より理想的には、他の usage の問題(例えば、仮定法の were/was, 無意志未来の will/shall, 特定の名詞の複数形, 「行ったことがある」の意の have gone/have been など)を雑然と配列した中に、これらの文をばらばらにして挿入すれば、それぞれの問題を意識しない、より自然な反応が得られやすいことは言うまでもない。

表2に示す結果は大体において筆者の予想通りである。数字上の小さな差異に関する解釈は控えて、可成りはっきり出ていると思われることを簡単に解説することにする。便宜上表2の集計結果を表1の左欄外に記入した。

<1>~<5>, <7>はいわゆる predication sentence でないのに対して, <6>, <8>~<11>はそうである。不定詞の前に for NP があるとき, それが母型文内のものであれ, 不定詞と一体となった S 内の主語であれ, すなわち不定詞補文が VP, S のいずれを構成していても, そこに OD が起こるのは, 母型文の中の主語を主題として叙述が行われているときであることは, <1 a>に対する<8 a>, <2 a>に対する<9 a>の数字の差にも現われている。<3>と<4>は回答者別に見ると二三の入れ替わりがあるものの全体として同じ数字が出たのは意外であった。<3 b>, <4 b>ともに文末の it が文頭の it とは別のものをも指示しうることから来た結果かも知れない。因みに<4>は Quirk *et al* の GCE で, it moves too quickly for most people to see (it) の形で「不定詞節が主語を含むことも含まないこともある」と述べて, 含む場合の例として挙げているものである。こゝでは ambiguity の指摘はない。<4 a>, <5 a>の高い数値は predication expres-

sion を、too … to ～構文の場合には、形容詞や名詞を中心に据えた普通考えられている形だけと解釈せず、意味を考慮して枠を拡げる必要のあることを示している。もちろん<5a>に対して、he is too fast a speaker to follow <5a'>がより高い数値を得たであろうことは容易に推測できる。<11>で、b (=19) > a (=10)であるのは 'try' に関係しないことは明らか (John is easy to please も John tries to be easy to please もともに grammatical) だから、歌の文句でもありリズムが関係していると考えられる。人口に膾炙する文句であるから、b を正解と選んだ人もあろう。(それはともかく、*My Fair Lady* の作者は OD を行っていないのである。ノ)

<1>、<2>、<7>と<4>、<5>とを比較すると、時制の違いによって<4>、<5>のほうが少し predication の度合が高く感ぜられるとすればそれも関係しているかも知れないが(18)～(21)の考察で明らかにした意味上の緊密さ、論理的に自然な関連性が無視できない原因である。「彼が〔は〕余りにも早く走る」と聞いて「(人が)追いつけない程度」と結びつける可能性と「彼が〔は〕余りにも早口で話す」と聞いて「(人が)その話について行けない」と結びつける可能性はどちらが大きいだろうか。前者<1a, b>では例えば「写真が撮れない」「呼びとめられない」なども同じくらいの自然さで結びつくのに対して、後者<5a, b>では「早口」—「話が分からない」が何よりも一番結びつきやすい。このことが、形式的にも predication の表現としての要求にかなった<6>の場合に如実に現われている。<6>と<7>を比較しても同様のことが言える。論理的に自然な関連性の程度が関与していることは、

it is for me to lift that the stone is too heavy

とは言いえども、

\* it is for me to avoid that she lives too close

\* it is for me to avoid her that she lives too close

と言えないことから明らかである。<6b>が0%という調査結果の重みから(10b)や(27a)の如き記述は軽卒と言わざるを得ない。

こゝで今一度 L & F の説に立ち帰って < 6 a, b > を眺めると, for me 以下の部分の内部構造を彼らは次のように区別している。

6 a' the stone<sub>i</sub> is too heavy for me [ VP to lift —<sub>i</sub> ]

b' the stone<sub>i</sub> is too heavy [ S for me to lift it<sub>i</sub> ]

そして < 6 a' > の for me は VP とは独立した前置詞句をなし、前置も後置も可能である (( 6 a'', a''' ))。このような状況では, tough predicate に係る OD と同じ変形が適用され、主語 the stone<sub>i</sub> と同一指示の NP が VP 補文内で削除される ( —<sub>i</sub> )。

6 a'' for me, the stone is too heavy to lift

a''' the stone is too heavy to lift, for me

< 6 b > では、S 補文内に母型文の主語と同一指示的な NP が削除されずに残っているのは SSC で削除が妨げられるからと考えている。< 6 a > の for me は < 6 a'' >, < 6 a''' > とあわせて三つの可能性のある場所のうちの一つを占めていることになり、意味的には「私にとって(は)」であって「(それを)持ち上げるのに) 重過ぎる」の「過ぎる(too)」を modify している。三つのうちのたまたま一つの位置としてであれば、for me の音調はみな同じで大体次のようになるものと一応考えられる。

6 a-1 the 'stone is °too \heavy | for ∨me | to \lift

6 a''-1 for ∨me | the 'stone is °too \heavy to ◦lift

6 a'''-1 the 'stone is °too ∨heavy to ◦lift | for \me (または  
the 'stone is °too \heavy to ◦lift | for ∨me)

しかし < 6 a > の実際の音調は、

6 a-2 the 'stone is °too \heavy for ◦me to ◦lift

となる。そしてこの音調は、< 6 b > が仮りに存在するとした場合のそれと、同じになる。いやむしろ、(表面的に) 同じ too … to ~ 構文の文で OD が適用されたものと適用されていないものとが普通同じ音調をもつと言い換えよう。基底となる文の構造の違いが、表面の構造では音韻的に調整されなおされるためであろう。< 6 a'' > でも < 6 a''' > でも、(は) のカッコがとれて「私にとっ

ては」であるのに対して、＜6a＞ではむしろ「私にとって」と「私が」が合体し二面性を持ったものになる。そして目的語を削除するか、しないかにはたびたび述べているところの logical relevance が大きく係っている。「石の重すぎることを」「石を持ち上げること、持ち運ぶこと」と関連させるのは極く自然なのである。to lift は言わなくても良い、for me だけで分かると言えるほどである。音調核 (nucleus) を heavy におき、lift を音調尾 (tail) に入れたのはそのためだが、次のように、lift に nucleus を置いても、音調単位内の強調される語の最後のもの (last accented word) に nucleus を置くという原理を守って、それ (lift) が大事な語の一つであることを示すのであって、同じ位に自然である。また、to lift の省略可能性をも考慮して、me に下降調の nucleus をおいてもよい。

- 6 a-3    the 'stone is °too °heavy for   °me to \lift (°  
                   the 'stone is °too °heavy for \`me to °lift)

アンケート調査の結果、＜6b＞は存在しないことが分かったが、＜6a＞の不定詞補文をVPでなくSと見なすと、[ S for me to lift — i ] となってSSCを見なおさなければならなくなる。SSCは実はそういう運命のものであって、さきにもそれを越えてODが行われる例を考察した。不定詞が受け身形である(19a, b, c)の場合、それぞれ for the stress, for a baby, for a baby を文頭の位置に前置できず構造的にSに間違いはないが、意味からすると全体で for NP に近いものであった。Faraci が too (および enough) の下位範疇の一つに for-句補文 (for-phrase complement) があるとして挙げている次の例(28)も(29)のように書き換えられる。

- 28            Nixon is too right-wing for my vote  
 29            Nixon is too right-wing for me to vote for (him)

(29)で(him)としたのは数人の英米人のインフォーマントに質問した結果である。次を見よう。

- 30 a        Senator Faghorn is too persuasive to like  
           b    \*Senator Faghorn is too persuasive to like him  
 31 a        \*Senator Faghorn is too persuasive for us to like

- b Senator Faghorn is too persuasive for us to like him

これらは L & F に見られるものだが、文法性の判定は自説の説明に都合よく合わせているのではないと思われるふしがある。(31 a) も (31 b) 同様に OK だとする英米人も多いのである。

- 32 a the salt crystals were too large for the water to break  
down

- b the salt crystals were too large for the water to break  
them down

(32 a) は Faraci の例だが、これについては、(32 b) も認められるが (32 a) がより自然だというインフォーマントが多い。

too ... to ~ 構文における不定詞補文の前の for NP の文頭への前置は、(19) のように補文が受け身形であるとか (33) のように there を用いた存在表現であるときを除けば、<6> について述べたような意味の違いを伴いはするが、大抵の場合に可能である。

- 33 [ L & F 99 ] John<sub>i</sub> is too obscure for there to be a book  
about him<sub>i</sub>

for NP の前置はその話題化 (topicalization) であるから for there が前置できないのは当然である。(29), (31), (32) では for NP の前置が可能である。これらを含めて、前置した場合には必ず OD が行われるのは L & F の OD 説に合致している。for NP が不定詞の前にあるときが問題で、意味と構造が微妙にバランスを図っているように思える。その for NP は話題化される潜在性と不定詞に対する主語の性格を併せ持っており、どちらに強く傾いているかが音調の上に必ずしも顕現しないのである。この二面性を無視して、S 補文中にあるとか、その外つまり母型文の中にあるとか言っても空しい議論である。意味の考察が不十分なまゝ不定詞補文の構造を VP だとか S だとか Subjectless sentence だとかに峻別することにこだわるのは無意味である。こゝまで来ると、問題の目的語が出没するときの話者の構文についての意識を問う必要にせまれるであろう。その調査にはいろいろな工夫が要るし困難もあるが、



これをも含めて広い視野からの語用論的研究が望まれる。話を元に戻して、ここで for NP が複数に現われる場合の一例を見ておこう。

- 34 for anyone with any brains, this effect is too important  
for the well-being of the species for us to ignore it

これは Bach and Horn が for NP が二つ以上ある例として挙げている (p. 268 脚注) ものであるが、彼らの言う通り for the well-being of the species は前の important を modify している。先頭の for anyone with any brains と for us は内容的に重なるが、anyone *without* any brains を除き去ってしまい、「およそ頭のある人ならわかる筈だが、かかる影響はその種の幸福にとって余りにも重要であり、われわれの無視できないものである」の意味になる。OD が適用されずに it が残ったことによって、for us to ignore it は前半と等分の独立性と重要性を持つ結果節といえるものになっている。for the well-being of the species は (36) の for the rich と同様に不定詞補文から独立した for NP であって (35) の scientists のような二面性を持っていない。

- 35 [ B & H 7 a ] that tribe is too unimportant for scientists to  
study

- 36 [ B & H 14 a ] it is pleasant for the rich for the poor to do  
the work

(34) の for us は総称人称であり、それに限定を加えた形の for NP が話題化されて存在するので、仮りに for us を省略すれば、どうなるだろうか。it は残るか、それとも消えるか。言うまでもなく this effect … for the well-being of the species は一つの音調単位を成して独立しており、別の音調単位の中で、this effect の持つ前述した意味での叙述の作用域が文末まで十分に及ぶかどうかが問題だ。too important と to ignore の logical relevance を考慮すれば及ぶ力があると思われるが、それがあっても補文が独立性を要求して結果節 (3 番目の音調単位を形成) に相当するものになったというのが (34) そのまゝの文に対する解釈であったが、for us が省略され、it も削除さ

れた場合, for the well-being of the species は important の修飾語として意味的に重要な役割を果たしている反面, 表面構造的には不定詞の前, つまり不定詞に対して主語として働らくものの占める位置に来ていて, しかも可成りの長さがあることが瞬間的に混乱を引き起こす原因となりうるから, 極く短かい休止を to ignore の前に置いて it を残すかも知れない。あるいは, too important … to ignore の緊密な論理的関係が, このいわば雑音をしのぐに十分強力であるかも知れない。また, この雑音部が逆に it を削除する方向に働らくかも知れない。なぜなら, it がなければ他動詞 ignore はおのが目的語を求めて遡及力を働かせ, 正面から伸びて来た this effect の支配力とがっちり手を結ぶことになるからである。しかしその最後の場合でも for us があればもっと整然とした形になると考えられる。

3. 2. ある文の文法性や容認可能性を論ずるとき, その判断が統語論上の根拠に基づくのか意味上の理由から来ているのかを明らかにすべきであるのは言うまでもないが, 特に統語論上の理由の場合は, これまでに確立されている(?) 文法規則の体系に合わないからといって直ちに非文法的と判断して良いのか。変形文法学者の中には, 言語の規則性と創造的側面に強い関心を持つあまり, 文文法の中では, 語用論的配慮から解放されて, 自己の直観力を過信した大胆すぎる議論が見られる。慣用のゆれがある場合, ときに片方を不用意に落したり, 無視したりすることがある。<sup>註6</sup> 理想化された形での言語能力の記述と現実の usage との間に隔たりがあるのは当然であるが, 後者の実態に強い関心を持つ筆者としては, 前者は後者の資料をもっと利用すべきだという意見である。

利用すべき重要な corpus として先ず考えられるのは, ロンドン大学の the Survey of English Usage (SEU) であり, too … to ～ 構文に関して調査した結果は次の通りである。<sup>註7</sup> 末尾の ( ) 内に整理番号を示す。

- 1 What is daft is that he seems only too keen for me to give it up. (W. 7. 32. 48)
- 2 I am far too busy to do any work anyway. (W. 7. 32. 41)

- 3 I was too shattered to sort of pick myself up (till)\* six months before I left (S. 1. 10. 64)
- 4 life is too precious to waste in regrets (W. 5. 2. 110)
- 5 I can't make it on Sunday because I'm working and it's too good an opportunity to miss (W. 5. 2. 84)
- 6 That often means boiling water applied from the outside if the pipe is not too high up the wall to reach. (W. 10. 1. 100-2)
- 7 Don't you find the noise of the engine too distracting to concentrate? (6. 4. 55-4)

\* 話し言葉には聞き取り困難なものがあり推測によるものは( )の中に入れてある。

to 補文を欠くもの (e.g. You're going too far and too fast for me — 5 b. 51. 19) や too … to ~ の形をしていても不定詞が something to eat 型の名詞修飾語であって predication と関係しないもの (e. g. There are too many characters and incidents to remember … — W 6. 2-11) を省くと、目的語削除に関係するものは 4, 5, 6 のみである。このように意外に少なく、特別に新しい発見はなかった。ただ、次の例はあることを示唆してくれているようだ。<sup>註 8</sup>

- 8 this is too strong an instrument | (we're) not prepare prepared to deal with this instrument | you see (S. 1. 2. 515-7)

これを too … to ~ 構文にパラフレイズすれば、

- 8' this is too strong an instrument for us to deal with, you see

となる。話者は 42 才位の男子の大学人 (academic) である。これで分かることは、われわれが論じてきた OD の絡む複雑な too … to ~ 構文は、特に口語では、案外に使用頻度が低いということ、そしてときには、上例のように、

too ... to ~ 構文の途中で so ... that ... 構文への切り換えも起こりうるということである。この形は too ... to ~ 構文と so ... that ... 構文の中間に立っていて、for NP の二面性とか、for NP to VPのそれだけで別の音調単位をつくらうとする性質とつながりを持っているように思われる。

3.3. SEUの資料だけでは満足できず、最近の用例を printed material で探した結果を次に示そう。

#### A 調査資料

- a The Times (1980 年 2 月 21 日)
- b The Times (1983 年 1 月 4 日)
- c Daily Mirror (1980 年 2 月 15 日)
- d Daily Mail (1980 年 9 月 9 日)
- e The Standard (1983 年 1 月 4 日)
- f Spectator (1980 年 2 月 2 日)
- g Tony Wilkinson, *Down and Out* (1981)

a ~ f については広告を含む全紙面の活字に目を通した。g は BBC 記者によるロンドン最下層社会の潜入体験報告記である。

#### B 用例（下線部筆者）

以下がAに見い出せる全用例である。最初の6例が直接ODに関するもので、あとの3例は参考となる用例である。

- 1) I share with Mr Smith his abhorrence of any romanticization of warfare, for the horrors that it will unleash will be too dreadful for most of us even to contemplate ——— a.
- 2) The programme ... will investigate the logistics of liquid hydrogen — how to pump it successfully through leak-proof lines, how to store it, and whether it is too volatile a liquid to handle safely in the environment of a modern airport  
———— a.

- 3) Another strange rock that is not too difficult to come across is known as a pudding-stone, ——— d.
- 4) Captain Broekmeulen said last night that all that was left on his ship after the looters had been on board was either useless or too heavy to remove. ——— b.
- 5) No visit to a foreign town for me is incomplete without a spree in the local market ... The other irresistible thing to spend money on is wicker work which is put together without the aid of wires, glue or nails. I was sorely tempted by a beautiful peacock chair but struggling on a plane with it was too much to contemplate so I settled for two pretty mirrors instead. ——— e.
- 6) We walked on to a park, where Jim opened the suitcase (which he had picked up from the dustbin on the way) and emptied the contents into a litter-bin. There was a pair of child's wellington boots, and carrier-bags stuffed with old pens and books. It seemed strange to be sifting through other people's belongings in this way, the objects seemed too private, too personal for us to be throwing them away so callously. ——— g. (カッコ内筆者)
- 7) Again, half the patients at clinics have tumours of five centimeters in diameter or more, which means they are too advanced for radical surgery to be the sole answer. ——— a.
- 8) (Thomas) Mann was far too subtle and complex a writer to be so easily classifiable. ——— a. (カッコ内筆者)
- 9) Public opinion — a heady compound of scientific ignorance, fear of the unknown and a healthy suspicion of

expert opinion — is far too deeply rooted to be assuaged  
by the confident assurances of one educated man behind a  
polished desk. ——— d.

ODに関する用例1)～6)のうち、for NP を不定詞補文の前にもっているのは1)と6)である。なお、3)は not too = not very の例と考えてもよい。1)の too dreadful … (even) to contemplate (「考えるのも恐ろしい」)は可成りよく使う自然な表現だろう。数少ない中に、5)の too much to contemplate と合わせて2例も見つかったから、too … to contemplate は可成りよく熟した collocation かも知れない。一層興味あるのは6)で、不定詞が進行形であることに注目したい。単に理屈の上で too private, too personal の基準を述べているのではなく、進行形を用いることにより、「余りにも個人的な、私的な物をこんなに無神経に捨ててしまっているが、これでよいのか」と彼らの今の現実の行為に重点を移した表現になっていて、これまでの考察結果から明らかな如く、目的語を削除しないのである。不定詞補文の動詞が句動詞であるものとか、本論では取り扱わなかったが、下接の条件 (subjacency condition) が問題となるところの構造的に複雑な補文の場合は、これまでたびたび議論の対象となっているが、6)の類が取り上げられているのは小生不敏にしてその例を知らない。今回の調査外だが、次の完了形を用いた例も同様の解釈がなさるべきものである。

Democracy is too great an ideal for any country to have achieved it perfectly yet. — Robert H. Grant <sup>註9</sup>

参考にするべきものとして挙げたもののうち7)と8)では、補文中に母型文の主語に遡及する動詞が他の品詞に姿を変えて存在している。9)は能動形にした場合補文が余りにも頭でっかち尻すぼまりになるのを避けている。いずれも書き言葉に見られる座りの良い表現である。

4. 以上、too … to ～ 構文で不定詞補文の目的語が表層文において現われたり現われなかったりする問題を、意味を重視して多角的に検討したが、この構文

の内部構造をきれいに二分して、

(i) X be too AP for Y [ to VP X ]

(ii) X be too AP [ for Y to VP X ]

ただし、X、Yともに名詞(句)。APの修飾語であって意味上不定詞の主語の關係に立ち得ない for NP は forY から除かれたものとする。

とすることはむずかしい。for Y は、不定詞句とは別個に too の modifier として働らく側面と、次に続く不定詞句の主語となってその nexus 全体が too の modifier となる側面を併せ持っているからであり、実際にはどちらかに強く傾いているのだが、そのことが必ずしも音調上に判然と現われないからである(—このことについては十分なデータが得られていないと言ふべきかも知れない)。大抵の場合 for Y を文頭へ前置することが可能であり、前置された場合は、補文が(i)の[ to VP X ]の構造を持つと言うことに問題はなく、X は表層に現われない。

いま、for Y が to VP の前に存在するとき、(i)、(ii)の区別は措くとして、表層文で補文のXがどうなるかについて、

X be too AP for Y to VP (X)

という一般式を与えることは慎重でなければならない。for Y to VP の内部結合が強く実質的に for-句に相当する意味を持つ場合(→a)とか、主節の述語 too AP とその修飾語 for Y to VP (とくにそのうちの to VP) との間の論理的関連性が非常に高く前者から後者が容易に予想できる場合(→b)にはXが現われない。つまり目的語削除が行われる、言い換えれば遡及不定詞の現象が起きるということである。これに反して、論理的関連性はあっても — そもそも too を限定する尺度として論理的関連性に乏しいものを持ち出すこともない筈だが — too AP の内容から to VP が一義的に予測できるほどでない場合には、Xを削除するかしないかに慣用のゆれが生じ、話者の意識とか表現意図が関係する。何かの過剰の基準を述べるというよりも、補文の内容に独立性を持たせ、そこに表現の重点を移したり、心理的な思い入れが強いときにはXは削除されない(→c, d)。

- a. the stuff is too unhealthy for a baby to be weaned on
- b. the stone is too heavy for me to lift  
the problem is too difficult for me to solve
- c. Nixon is too right-wing for me to vote for (him)
- d. the objects seemed too private, too personal for us to be  
throwing them away so callously

この他、リズムが関係することであろうし、(34)で取り上げた‘雑音的要素’も考慮されねばならない。また、My Fair Lady からの例では、for Y の部分が省略されており、しかもそれが特定指示的な for me であるのは、例外的であるとしても注目に値する。リズムだけでなく、この場合ビートの数も関係しているかも知れないし、文脈に依存する一面もあるに違いない。そして it が削除されずに残ったのには、次の如き深層の心理が考えられよう。

Bed! Bed! I couldn't go to bed!

My head's too light. No, I couldn't try to set it down.

#### 註

- 1 こゝで取り上げる目的語削除 (Object Deletion) に関する問題では enough は too と全く同じ振る舞いをするので enough の用例を吟味することも有益である。
- 2 筆者としてはこの文は存在しないと考えており、おいおいそれを明らかにする。
- 3 Faraci (1974) は第1章で purpose clause を objective clause, rationale clause と比較して詳細に論じている。広田則夫 (1983) はこれを紹介し、purpose clause について語用論的観察を深め、purpose clause の主節 (Matrix Sentence) の述部に対する依存度が補文 (purpose clause) の目的語削除に関係することを論じている。
- 4 音調の表記は O'Connor and Arnold (1973<sup>2</sup>) の方法に準拠する。以下同じ。



5 University College London の学生を対象に 1980 年 2 月に実施したもので、そのために講義の時間を割いて協力を惜しまれなかった Richard Hudson 博士の御好意に深く感謝する。回答者 39 名中アメリカ人 1 名をはじめ東洋人を含む 10 名分は割愛し、表 2 には英国人 29 名分を載せた。回答者の方言区分はこの種の文法問題では意味を持たないようだが、回答のあった通りに次に記しておく。

1. Greater London, 2. B (SE), 3.~7. RP, 8. None really, R. P.?, 9. S. W. & Lancs, 10. Bucks., 11. Heref., 12. Slight Tyneside, 13. N. W. (Cheshire), 14. Derbys./Staffs., 15. Liverpool, 16. Norfolk, 17. nondescript (no localised area) 18. Ulster, 19. Standard South British, 20. Southern Standard, 21. London/Essex (Lower Middle Class), 22. Herts., 23. Northern-RP, 24. Standard, 25. East Anglian, 26. Notts., 27. Wirral (Cheshire), 28. Sheffield, 29. Scottish

6 Quirk (1977) が指摘するように、Chomsky (1977) では the house is ready for John to buy (it) の it が optional と考えているのかいないのかはっきりしないあいまいな扱い方をしている。cf. Quirk (1977) ; Chomsky (1977), P. 103, P. 107.

7 貴重な資料を自由に閲覧できるように便宜を計って下さった Quirk 教授ならびに SEU の staff に深謝する。最後に調査したのは 1983 年 1 月 4 日。

8 SEU のコーパスのうち Spoken English の部は強勢や抑揚のほか、テンポ、声の大きさから笑い、すゝり泣きなどまで記録していて煩瑣である。同じコーパスで基本的な韻律素性だけを示して簡略化したのが Lund 大学の Survey of Spoken English (SSE) である。これによると引用部は下記の通りである。

515 this is || TOO · strong an INSTRUMENT ■ 516 《 we're 》 ||  
not [ pripeə ] prepared to △DEAL with ▷this instrument ■  
517 you || SEE ■

これをO'Connor-Arnold 式の表記法で書き換えると、おおよそ次のようになる。

-this is ʔtoo ɔstrong an ʌinstrument | (we're) ʔnot preþare  
preþared to ʔdeal with >this ɔinstrument | you ʌsee

9 Robert H. Grant, *Essays* (Kyoto: Biseisha, 1951), p. 1

#### 参 考 文 献

- Bach, Emmon and George M. Horn. 1976. Remarks on "Conditions and Transformations." *Linguistic Inquiry* 7: 265 - 361.
- Berman, Arlene and Michael Szamosi. 1972. Observations on Sentence Stress. *Language* 48: 304 - 325.
- Bresnan, Joan W. 1971. Sentence Stress and Syntactic Transformations. *Language* 47: 257 - 281.
- Chomsky, Noam. 1977. On Wh-Movement. In *Formal Syntax*, P. Culicover *et al.*, Eds. New York: Academic Press.
- Faraci, Robert A. 1974. *Aspects of the Grammar of Infinitives and For-Phrases*. Diss., MIT.
- Greenbaum, Sidney and Randolph Quirk. 1970. *Elicitation Experiments in English: Linguistic Studies in Use and Attitude*. London: Longman.
- 広田 則夫 1983. 補文目的語削除と目的節の意味タイプ 『英語学 25』 開拓社
- Jackendoff, Ray. 1975. *Tough* and the Trace Theory of Movement Rules. *Linguistic Inquiry* 6: 437 - 464.
- Lasnik, Howard and Robert Fiengo. 1974. Complement Object Deletion. *Linguistic Inquiry* 5: 535 - 571.
- O'Connor, J. D. and G. F. Arnold. 1973<sup>2</sup> *Intonation of Colloquial English*. Longman.
- Oehrle, R. T. 1979. A Theoretical Consequence of Constituent Struc-

- ture in *Tough* Movement. *Linguistic Inquiry* 10 : 583—593.
- Perlmutter, David M. and Scott Soames. 1979. *Syntactic Argumentation and the Structure of English*. Univ. of California Press.
- Quirk, Randolph and Jan Svartvik. 1966. *Investigating Linguistic Acceptability*. The Hague : Mouton & Co.
- Schachter, Peter. 1981. Lovely To Look AT. *Linguistic Analysis* 8 : 431 — 448.
- Svartvik, Jan and Randolph Quirk., Eds. 1980. *A Corpus of English Conversation*. Lund : Liber Läromedel.